

1 当日のプログラム

12:30~13:10	① 生徒課題研究ポスター発表会	
13:10~14:00	② 創造的思考スキルを育成する授業実践	4年生 (高校1年生)
14:10~15:00	③ 批判的思考スキルを育成する授業実践	2年生 (中学2年生)
15:10~16:10	④ 授業協議会(思考スキルの育成)	
16:30~17:30	⑤ SGH情報交換会	

2 各プログラムの内容(丸囲みの数字は上記のプログラムの数字と一致)

① ポスターセッションとは、各個人または各グループで作成した研究成果を1枚の模造紙にまとめて発表するというもので、SGHの全国フォーラム等ではおなじみのものである。掲示してある中の1枚の模造紙が目に残った。テーマは、「先進国の母子家庭貧困率減少に向けて」。翌日分かったことだが、これがSGH全国高校生フォーラムに出品しているものであった。翌日は、当然英語で書かれていた。

② 創造的スキルの一例として、「韻」を踏んでストーリーをつくるという、レベルの高い指導がなされていた。普通に英語でストーリーをつくっていくのも時間がかかるが、(英語の歌の歌詞にならって)さらに語末で韻を踏むように一工夫しなければならない。今回の場面設定は「台所」であった。

例(韻の部分のみ書き出す): I want to *eat*. And I like *meat*. I like *turkey*. But I don't like *jerky*

I'll eat the *pork*. And I'll use the *fork*..

確かに言語感覚は磨かれる。

③ 最初は、前の授業の復習として、先生から日本語が与えられ、席の前の生徒がそれを小さなホワイトボードに英語で書いて答える。2つ目の問題はその後ろの生徒が同様に答えるというもの。環境(environment)とか減らす(decrease)など、中学2年では難しい単語もあるが、半数以上は正しい綴りで答えることができている。

次に、「三匹の子ぶた」の英語版が読まれる。パワーポイントで画像も一緒に流れるので大体の流れはわかる。そして英語のスク립トが配付される。さて、ここからが批判的思考スキルの出番である。3人ずつのグループに分けられ「このおとぎ話の中で、自分が疑問に思うことを英語で書き出しましょう。そしてその答えを考えましょう」と先生が指示をする。「誰が一番賢かったのか」とか「お母さんぶたは、子ぶたたちに何を教えたかったのか」といった質問から、「なぜそこに梯子があったのか」、「お母さんはどういう性格だったのか」、「この話は一日のうちで何時ぐらいの話か」など、グループ内で様々な質問が出ているようで、それに対してグループ内で答えをつかって、最後に皆の前で発表する。先生は、生徒が発表した英文をすぐにタイピングしプロジェクタで映し出す。こうするとあつという間に皆で共有できることになる。生徒も先生もレベルが高い。

④ 学校側からの説明として、この学校に入学する生徒(中学1年次)は、英語ができる生徒ばかりではない、小学校時代に英語をどれだけ学習してきたのかという観点で見ると他の中学校とほとんど変わらないという。1年次から3年次(中学校1年から3年)は英語の授業は6時間で、それぞれAdvancedとCoreに分けるという。4年次から6年次(高校1年から3年)は1時間増加し、Advanced、Basic、Coreに分ける。本日の研究授業は2つとも、英語を苦手とするクラスであるCoreとのこと。成績はルーブリックによる観点別評価を導入していて10項目の基準を設けている。生徒にはそれらを全て伝えてあり、その基準のクリアが生徒の励みになっているとのこと。ペーパー試験のほうが公平性を保てるのではないかという質問には、基準を厳格にして英語科内で統一しているためペーパー試験に重きを置くことはしていない、スピーキングはボイスレコーダーで対応しているとのこと。4技能のうちスピーキングを重視しているためか、授業中の生徒の発言が多く感じた。

⑤ 情報交換会では、SGH指定校の方々がこのSGH事業が終了した後のことを危惧されているようだった。特に生徒の海外研修費など金銭的支援がなくなることに對しての不安である。一方で、この事業により生徒がJICAやマイクロソフト社など、社会の大きな団体と積極的につながるようになったのは大きいとも。なるほど、これまでの学習活動では、**社会と対話**することはなかったのは確かである。今後は、そこで身に付けた能力を生かして、進路実現という点でステップアップする際、**大学との対話**が必要になってくるだろう。しかし、「自分はこれだけの力をつけてくることができたんだ、だから自分はこれがやれるんだ」というように、自分と向き合い自分に何ができるのかを考えていくという**自分との対話**が一番求められているのかもしれない。

